

2018

FD・SD
Faculty Development Staff Development

成城大学 Activity Report

はじめに：副学長／FD・SD小委員会委員長ご挨拶

新任教員研修会

授業改善アンケート

FD・SD講演会

「地学・教職・学職一体の教学改革
～KYOAI GLOBAL PROJECTを中心に～」

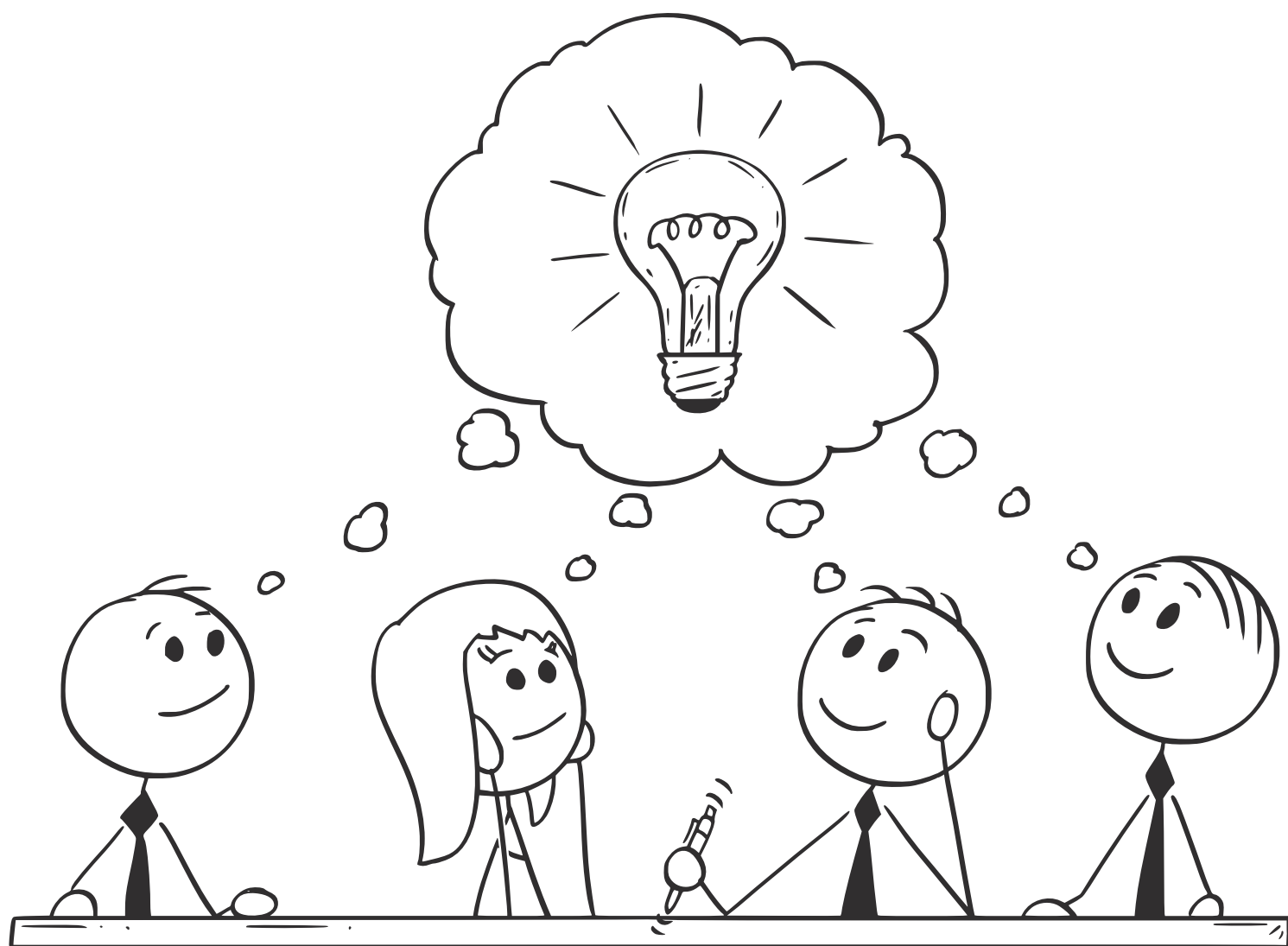
FD・SDシンポジウム

「探究学習をデザインする」

各学部のFD・SDへの取り組み

ピアチューター制度に係るSD活動報告

2019年度活動計画



学生を懸命にさせる教育をめざして



はじめに

副学長
教育イノベーション委員会FD・SD小委員会委員長

杉本 義行 教授

昨年度の本学のFD・SDにかかる事業は、無事に実施することができました。皆様のご協力とご理解に感謝申し上げます。

本年度のFD・SD活動は従前どおり、①新任教員研修会、②授業改善アンケート、③FD・SD講演会の3つを柱として進めてまいりました。前号でもご報告したように、授業評価アンケートは10年目の昨年度に大幅な見直しを行い、名称も授業改善アンケートとして一新し、学生目線に立って当該授業によって身についた資質・能力や授業方法等に関する質問項目を拡充いたしました。これにより意図した授業の狙いがきちんと伝わっているのか、あるいは、到達目標を達成するうえで適切な授業デザインであったか等を振り返り、改善するためのヒントとしてご活用いただければ幸いです。

授業改善アンケートの活用といえば、「成城大学ベストティーチャー表彰制度」を遅ればせではありますが発足させました。この制度の趣旨は、「優れた教育及び教育改革を先導している教員に対して、その功績を表彰することで、本学教員の教育意欲の向上を図り、併せて大学教育の活性化を図ること」にあります。今回は、回答者数の規模別にわけた4つの部門から非常勤の先生方も含めて16名が選出されました。

ベストティーチャーの皆さんが授業にあたり心がけていることや授業方法等を共有するべく何人かの先生方に『授業カタログ』にご登場いただくことを予定しており、こうしたベストプラクティスをヒントに、日ごろの授業改善にお役立ただければ幸いです。

授業での皆様の日ごろのお悩みや素朴な疑問を解消する目的で、授業デザインの専門家をお招きして、気軽なワークショップ形式の「お悩み相談」を検討しております。

FD・SD講演会については、昨年度は2回開催いたしました。詳細は、本文をご覧くださいとしまして、まず、12月には共愛学園前橋国際大学学長の大森先生による教職協働に関するご講演を開催いたしました。

さらに、3月末には「探究学習をデザインする」をテーマにシンポジウムを開催し、全国から170名を超えるご参加をいただきました。高校では新学習指導要領の先行実施として「総合的な探究の時間」となり、教科学習の要としての「探究」がスタートしました。シンポジウムの参加者の4割が高校以下の教員であり、現場での関心の高さがわかりました。大学にとっても、「問いをたてる」「課題解決」といった探究学習が浸透すれば、その学習成果を入学者選抜にどう活かすのか、あるいは、WRDを含めた初年次教育はどうあるべきか、等といった問題について検討していく必要があるかと思えます。

今後、探究学習のプロセスに大学がどう関与するのか。たとえば、甲南大学のリサーチフェスタや金沢大学のラウンドテーブルのように、探究学習の成果を発表する場の提供などを高大接続の枠組みの中で考えていく必要があると考えます。

FD・SD活動について、教職員の皆様からのさまざまなご意見やご要望を賜れば幸いです。

2019年10月

新任教員研修会

新任の先生方に一日でも早く本学をご理解いただき、円滑な教育活動を始めていただくための一助として、毎年新任教員研修会を開催しています。

2018年度は4月7日(土)に、専任教員13:00~16:45、非常勤講師13:30~16:00の時間帯で行いました。

専任教員は対象者7名全員(経済学部1名、文芸学部1名、法学部2名、社会イノベーション学部1名、共通教育研究センター(特別任用教授)2名)、非常勤講師は52名のうち31名が参加されました。



学長による本学の沿革、取り組み等に関する解説

専任教員・非常勤講師共通スケジュール

内容	担当
・ 研修説明	FD・SD小委員会委員長
・ 挨拶	学長
・ 成城大学の沿革 ・ これからの取り組み(第2世紀ビジョン) ・ 自己点検・評価と認証評価等	学長
・ 授業に関することについて 学則、学年暦、休講・補講、欠席届、公欠、教室使用・教室変更、機材設置、聴講生・科目等履修生、他学部聴講等 ・ Campus Square for Webについて 受講者名簿、成績入力等 ・ 試験、レポートについて 定期試験、追試、再試、試験施行内容登録等 ・ 成績について 成績評価・開示(評価分布含む)・問い合わせ制度等 ・ シラバスについて 記載必須事項等 ・ 授業改善アンケートについて 実施要綱等	教務部
・ ハラスメントについて	ハラスメント防止委員会
・ 特別な支援を必要とする学生について	バリアフリー委員会
・ 非常時(火災・地震等)の対応について	企画調整室
・ 教育研究用ネットワークとその利用について ・ 情報関連設備、外国語教育設備、教材作成設備とその利用について ・ e-learningツールとその利用について	MNC
・ 図書館現地視察 図書館の概要・利用方法について、他大 学利用状況、ピアサポーター等	図書館



各担当者からの説明の様子

専任教員にプラスした内容

内容	担当
・ 教員業績システムについて	総務課
・ 成城学園の建学の精神 ・ 教育理念等について(DVD)	教育研究所
・ 科学研究費助成事業について ・ 特別研究助成費について	研究機構事務局

非常勤講師にプラスした内容

内容	担当
・ 非常勤講師控室現地視察 非常勤講師控室の利用方法について等	非常勤講師控室



授業改善アンケート

「学生授業評価アンケート」から「授業改善アンケート」へ

2018年度より、「学生授業評価アンケート」は、エンロール・マネジメントを視野に入れたIRでの調査・分析も必要であることを見据えた「授業改善アンケート」へと名称を変え、質問項目の見直しや新設等を行いました。

大学、大学院の全科目を対象とし、前期、後期の2回実施いたしました。実施状況は、実施任意科目も含め、2,678科目中2,251科目(実施率84.1%)でした。

アンケートの集計結果は、Campus Square for WEBで学内公開し、別途、科目別集計表を各科目担当者へ、大学全体集計表、科目開設部門別集計表、授業形態別集計表を学長、学部長、研究科長、共通教育研究センター長、国際センター長、キャリアセンター長へ報告いたしました。

また、アンケート集計結果の概要および集計結果に対するコメントは大学ホームページに掲載しておりますのでご覧ください。

この集計結果を授業改善に役立てたいと考えておりますので、今後とも本アンケートにつきまして、ご協力いただきたくお願いいたします。

2018年度 前期 授業改善アンケート集計結果

成城大学

対象	大学全体		実施対象科目数(A)×(B)	984	実施科目数(O)×(D)	903	延べ回答者数	40,507		
			実施必須科目数(A)	678	実施科目数(O)	661	延べ回答者数	26,986		
			実施任意科目数(B)	316	実施科目数(D)	242				
設問	項目	平均値	設問10の 相対割合	回答数(A)/回答率(%)					有効 回答数	割合
				5	4	3	2	1		
1	この授業に欠席した回数は次のようである 5/7回以上 ④6~5回 ③4~3回 ②2~1回 ①0回	4.05	0.00	1,741	561	3,269	9,086	10,910	25,567	1,419
				6.8	2.2	12.8	35.5	42.7		
2	授業中、この授業の内容を理解するために努力した(ノートをとる等)	3.91	0.42	8,299	9,911	6,245	1,704	631	25,790	1,196
				32.2	38.4	20.3	6.6	2.4		
3	教員は休講や遅刻をすることなく授業を行っていた	4.20	0.40	13,893	7,792	3,054	1,019	397	26,155	831
				53.1	29.8	11.7	3.9	1.5		
4	教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかった	4.19	0.65	12,069	8,631	8,763	1,116	381	26,180	806
				46.7	33.7	34.3	4.3	1.5		
5	この授業のレベルはあなたにとって適切であった	3.99	0.69	9,998	10,699	6,394	1,429	349	26,181	805
				34.3	38.3	20.6	5.4	1.3		
6	教員は教室内で学習にふさわしい状態(私語等対応)に保たれるよう心掛けた	4.26	0.59	12,187	9,406	3,654	663	213	26,183	803
				46.5	36	14.1	2.5	0.8		
7	教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した	3.85	0.47	9,598	7,4				26,186	820
				36.6	2					
8	シラバスと授業の内容が一致していた	4.27	0.64	12,039	9				26,187	820
				46.7	0					
9	この分野への興味・関心が引き起こされた	4.00	0.84	10,292					26,188	820
				41.7						
10	この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった	4.14	0.84	10,908					26,189	820
				41.7						
11	教員の板書、スライド等は見やすかった	4.05	0.66	10,199					26,190	820
				41.7						
12	1回分の授業に当たり、授業時間外の事前・事後学習のために費やした平均的時間は次のようである ⑤1.5h以上 ④1~1.5h未満 ③0.5~1h未満 ②0.5h未満 ①ほとんどしていない	2.41	0.22	2,104					26,191	820
				8.4						
スポーツ・ウェルネス実技のみ回答										
13	授業で十分に運動することができた	4.73	0.63	31						



2018年度 後期 授業改善アンケート集計結果

対象	大学全体		実施対象科目数(A)×(B)	1,513	実施科目数(O)×(D)	1,280			
			実施必須科目数(A)	900	実施科目数(O)	879			
			実施任意科目数(B)	613	実施科目数(D)	401			
設問	項目	平均値	設問10の 相対割合	回答数(A)/回答率(%)					
				5	4	3	2	1	
1	この授業に欠席した回数は次のようである 5/7回以上 ④6~5回 ③4~3回 ②2~1回 ①0回	4.02	0.01	1,288	761	4,547	12,779		
				4.3	2.5	15.2	42.7		
2	授業中、この授業の内容を理解するために努力した(ノートをとる等)	3.88	0.43	9,128	11,895	6,382	2,111		
				30.3	39.3	21.2	7.2		
3	教員は休講や遅刻をすることなく授業を行っていた	4.29	0.42	16,520	10,010	3,894	1,111		
				50.8	32.8	11.8	3.2		
4	教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかった	4.20	0.67	13,849	10,825	4,397	1,111		
				45.3	35.4	14.4	3.2		
5	この授業のレベルはあなたにとって適切であった	4.01	0.70	10,514	11,855	6,244	1,111		
				34.4	38.1	18.2	3.2		
6	教員は教室内で学習にふさわしい状態(私語等対応)に保たれるよう心掛けた	4.24	0.62	13,794	11,459	4,472	1,111		
				45.0	37.5	14.8	3.2		
7	教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した	3.86	0.49	11,098	9,015	6,834	1,111		
				36.4	29.5	22.4	3.2		
8	シラバスと授業の内容が一致していた	4.26	0.67	13,758	11,525	4,780	1,111		
				45.1	37.8	15.7	3.2		
9	この分野への興味・関心が引き起こされた	4.10	0.85	11,908	11,447	5,591	1,111		
				40.7	38.1	17.1	3.2		
10	この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった	4.14	0.69	11,780	10,738	5,591	1,111		
				39.0	35.5	17.1	3.2		
12	1回分の授業に当たり、授業時間外の事前・事後学習のために費やした平均的時間は次のようである ⑤1.5h以上 ④1~1.5h未満 ③0.5~1h未満 ②0.5h未満 ①ほとんどしていない	2.43	0.20	2,389	3,279				
				8.1	11.2				
スポーツ・ウェルネス実技のみ回答									
13	授業で十分に運動することができた	4.76	0.55	279	57	11	0	348	31,156
14	あなたの身体の健康、体力、生活習慣を見直す機会となった	4.62	0.60	256	69	26	4	3	31,157

※設問17~22は非表示です。

アンケート集計結果はWeb上で公開しております。



地学・教職・学職一体の教学改革 ～ KYOAI GLOBAL PROJECT を中心に～

講師 大森 昭生先生(共愛学園前橋国際大学 学長)

日時 2018年12月7日(金) 午後4時30分～6時15分

人口減少、グローバル化の進展、AIを中心としたテクノロジーの急速な進歩など社会が大きく変化する中、社会を生き抜くために必要な資質・能力は高度化し、大学の果たす役割は重要性を増えています。こうした時代の変化に対応するために、大学の持つ限られた資源を総花的にではなく、選択的に集中させることと教職員組織の組織開発が大学改革のカギとなっているように思われます。

この度の講演会では、“地域”をキーワードとして人材育成目標を再定義し、グローバル人材育成事業、地(知)の拠点大学による地方創生推進事業、AP(大学教育再生加速プログラム)、私立大学等改革総合支援事業に採択された4つの文部科学省の補助事業を有機的に結びつけ、社会連携を学びに直結させ、地域に貢献する人材の育成に大きな成果をあげている共愛学園前橋国際大学の**大森昭生学長**をお招きし、地域連携を学びにつなげる仕組みや教職協働の組織開発といった教学改革の取り組みを中心にお話しいただきました。

本講演会は成城大学教育イノベーション委員会FD・SD小委員会主催、世田谷プラットフォームFD・SD部会後援のもとで開催し、学内外あわせて54名(内訳は下表参照)の参加があり、盛会のうちに終了しました。当日の講演内容については、大学ホームページで公開しておりますので、ぜひご覧ください。

FD・SD 講演会参加者内訳

所属		人数
学内	大学教員	5名
	職員	22名
学外参加者		27名
計		54名



講演内容をWeb上で公開しております。



探究学習をデザインする

基調講演：学校のマナビを越境する — 探究学習の構造とプロセス —

講師 森 朋子先生(関西大学教育推進部 教授)

実践報告1：探究を探究する ～立命館宇治高校・研究開発学校の取り組み～

講師 酒井 淳平先生(立命館宇治中学校・高等学校 教諭)

実践報告2：教育の価値観を再定義する

講師 中原 健聡先生(札幌新陽高等学校 校長の右腕)

実践報告3：探究の入り口に立つ ～成城教育を取り入れた新しい学び～

講師 青柳 圭子先生(成城学園中学校高等学校 教諭)

日時 2019年3月16日(土)午後1時～5時

テクノロジーの発達による急速な社会の変化に呼応して、生きていく上で必要とされる資質・能力が大きく変わってきています。

知識などの「見える学力」だけでなく学ぶ学力や意欲といった「見えにくい学力」「見えない学力」も重要な時代となってきています。その流れに伴い、学校も「教師が教える場」から「生徒が学ぶ場」へと変化しています。

ミネルバ大学やハイテック・ハイ(高校)等での最先端の学びが、プロジェクト学習を主とした手を動かしながら学ぶカリキュラムへとシフトし、また、新高等学校学習指導要領において「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」に変更され、探究学習が学びの要として位置づけられたのは、このような背景があると言われています。

成城大学 FD・SD シンポジウム

探究学習をデザインする

日時 2019年3月16日(土)

シンポジウム
13:00～17:00(開場 12:30)
懇親会
17:15～19:00(会費1,000円)

会場 成城大学3号館 地下1階 003教室

参加対象 教育関係者(教員・職員等)、学生、一般の方

主催 成城大学教育イノベーションセンター(教育イノベーション委員会 FD・SD小委員会)

共催 成城大学入学生センター、成城学園中学校高等学校

基調講演

「学校のマナビを越境する
— 探究学習の構造とプロセス —」
森 朋子 先生
関西大学教育推進部 教授

実践報告

「探究を探究する — 立命館宇治高校・研究開発学校の取り組み —」
酒井 淳平 先生
立命館宇治中学校・高等学校 教諭

「教育の価値観を再定義する」
中原 健聡 先生
札幌新陽高等学校 校長の右腕

「探究の入り口に立つ
— 成城教育を取り入れた新しい学び —」
青柳 圭子 先生
成城学園中学校高等学校 教諭

お問い合わせ先 成城大学教育イノベーションセンター TEL: 03-3482-9069
東京都世田谷区成城6-2-20 E-mail: ceri@seijo.ac.jp

※申し込み方法は要項をご覧ください。



とはいえ、先行的に実施される「総合的な探究の時間」をどのようにデザインするのか、どのように授業を進め、評価はどうするか、更には探究学習において大学はどう取り組んでいくのか等、教育現場ではまさに手探り状態が続いていると言えるのではないのでしょうか。

この度のシンポジウムでは、第一に、今なぜ探究学習なのか?そのねらいは何かという根源的な問いを、第二に、探究学習で育まれる資質・能力、問いの設定、評価などの観点からいかにデザインするのか?そして、第三に、探究学習をめぐる大学の役割は何か?以上の三つの問いについて基調講演と先進的な実践報告で探求学習の学びの構造を理解し、その後のパネルディスカッションで広く意見を交換し、探究に関する考え方を共有することができました。

当日の参加者は174名(内訳は下記詳細)となり、盛会の内に終了しました。当日の講演内容については、大学ホームページで公開しておりますので、ぜひご覧ください。

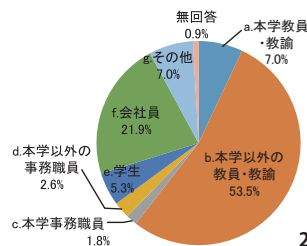
FD・SD シンポジウム参加者内訳

所属		人数
学内	大学教員	6名
	中学校高等学校教諭	4名
	職員	11名
学外参加者		153名
計		174名

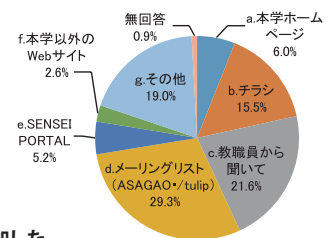


〈アンケート結果〉

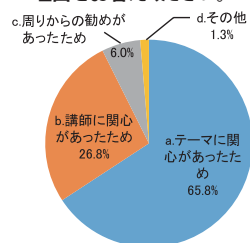
1. ご所属をお教えてください。



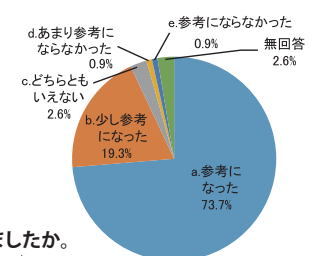
2. 本シンポジウムを何でお知りになりましたか(複数回答可)



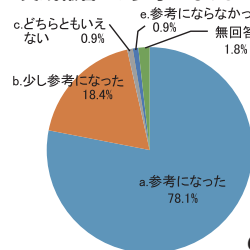
3. 本シンポジウムに参加した理由をお答えください。



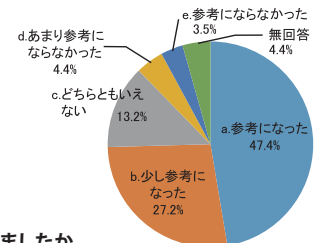
4. 基調講演は参考になりましたか。



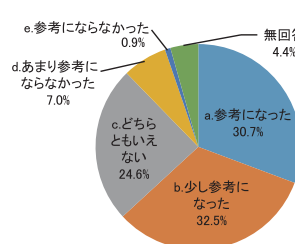
5. 実践報告1は参考になりましたか。



6. 実践報告2は参考になりましたか。



7. 実践報告3は参考になりましたか。



シンポジウム内容をWeb上で公開しております。

各学部のFD・SDへの取り組み1

文芸学部

文芸学部におけるFDの取り組みについて

文芸学部
高名 康文 教授



本稿では、文芸学部の1年生の必修科目である文芸講座とWRD、ほぼすべての学生が受講する英語科目のSEEに加えて、文芸学部の正課外の活動におけるFDの試みについて紹介する。

文芸講座は、「第2世紀の成城教育」へ向けた取り組みとして2015年に開講された半期の講義科目で学部1年生の必修科目である。学生が、「人間の文化的営為に関する多角的な研究・考察を通じて、豊かな教養、柔軟な思考力、広い視野を修得する」ことを人材育成の目的に掲げる文芸学部の全体像を理解できるように、2つのテーマのそれぞれについて、文芸学部6学科の教員が1回ずつ、それぞれの研究分野から論じる。2015・16年度は「古典」「文化」、17・18年度は「幸福」「声と文字」、19・20年度は「祭りと祭典」「旅」というテーマが設定された。

授業評価アンケート(2017年まで)と授業改善アンケート(2018年)によると、「総合的にこの授業を評価できる」の平均値は初年度(2015年度)は3.62だったものの、その後の3年間は3.90から4.13に上昇している。この問いと相関値の高い「この授業のレベルはあなたにとって適切であった」と「この分野の関心と学力が得られた」の値が上昇していることから、2年目以降、自分の専門にもともと関心のない学生にも訴えかけるための努力がなされたことが窺える。

自由記述欄には「様々な分野から同じテーマを学ぶことで多方面への興味ももてた」というような積極的な評価が寄せられる一方で、授業運営への不満(1限なのに電車の遅延があっても遅刻扱いをされるのが不満だ、私語と居眠りを注意する教員の態度がよくない)を記すものもあった。不満の妥当性は別にして、関心が学問に対して広く開けていない学生に教師がいかにか接するかが問われている。大学の初年次

の講義科目にとっての永遠のテーマである。

この授業では毎年、情報交換により改善の工夫が行われている。2019年度に行われた新しい試みを紹介すると、まず、学生の予習のために配布している「文芸読本」には授業の内容の3分の1程度を記すにとどめて、教室で残りの部分の話しをするということになった。授業で新しい話を集中して聞けるようにという狙いである。さらにWebClassを活用し、授業で使ったパワーポイント資料、授業後の追加資料、レスポンスシートへの回答をアップするようにした。期末試験に向けて関心を高めてもらうことが目的である。他学科で行われている学問への関心を高めることにより、文芸学部で現在取り組んでいる、副専攻の履修者の増加にも繋がるのが期待される。

続いて、1年生対象の共通教育科目WRDに関して、文芸学部が行っている取り組みについて述べる。本科目は、大学での学問への導入ゼミという性質を持っているが、文芸講座により学部で行われている学問の全体像を把握した学生が、この学問領域の方法論の基礎を学ぶ場と位置づけられる。2015年には、それまで通年科目であったものを、前期WRDI、後期WRDIIという半期ずつの科目として、それまでに増して組織だって運営されるようになった。WRDIは統一シラバスに基づいて展開をされている。問いをたて、それを解決するという論文の基本的な構造を理解すると同時に、問題解決のための基本的な方法を身に付けることが目的である。後期のWRDIIでは、「書く(W)」「読む(R)」「観察する(RE)」「議論する(D)」の4コースを設けて、前期の学びを深化させる。マスコミュニケーション学科ではREが必修になっている。

2015年度の開講時に担当者連絡会議が開かれたことは、本誌2015年号の木下誠教授の原稿に記されているが、2017年度末にも会議が開かれた。その際には、共通教科書の使い方や、学生の動向について情報交換が行われた。この担当者会議や、それ以前からの情報交換を踏まえて、2018年度には制度の変更が行われた。WRDIIで、「書く(W)」のコースの希望者が多く、「議論する(D)」のコースの希望者が少ないことに鑑み、クラス数の変更が行われた。また、「議論する(D)」はディベート大会に向けての課題が多くて大変だという評判が学生の間であり、履修を避ける傾向があると判明したので、その対策も行われた。2017年度までは前期にWRDIと同時に行われていたWRDIIの登録を、2018年度からは後期の登録時に行うようにしたというものである。これまでディベートに関心を持ちながらも、自信がなくて避けていた学生にも、WRDIを通して自信と関心を深めてもらい、WRDIIの「議論する(D)」に登録してもらおうという狙いである。ただし、この年は予備登録についての周知が十分でなかったため、新しい制度は充分には機能しなかった。また、各コースの内容紹介がシラバスの情報だけでは十分ではないと判明したので、2019年度からは、各コースを紹介するプリントを前期に文芸講座の授業で配布することになった。

以上のように文芸学部のWRDでは、授業担当者の情報交換によって制度の見直しと充実が図られている。アンケートの「総合的にこの授業を評価できる」の平均は、年によってばらつきはあるものの、あらゆるコースについて概ね4.2から4.5である。自由記述欄の回答は、授業によりばらつきがあるが、困難だと思っていた課題に立ち向かったことが、今後の学生生活のために役立つことだろう、という積極的な回答が複数のクラスに見られる。熱心な指導が行われ、それに応える学生がいることが読み取れる。

次に英語科目におけるe-learningについて紹介する。文芸学部の初年度英語カリキュラムでは2015年度に、15名程度の少人数教育のアクティブ・ラーニングの授業としてSEE(Seijo Essential English、前期はSEE-A、後期はSEE-B)が設けられた(当時の

内容と狙いについても本誌2015年号の木下誠教授の原稿に詳しく記されている)。この科目についても2018年度に変更があった。それ以前は、日本人が担当するSEE-Inputについても、英語ネイティブの教員が担当するSEE-Outputについても、Web教材ALC NetAcademy2を用いていたが、この年度より教材を「ぎゅっとe」に変更し、SEE-Inputクラスのみで使用するようになった。クラスは4つのレベルのクラスにそって分けられており、リーディングとリスニングの授業に加えて、毎週、文法・リーディング・語彙・リスニングの課題が与えられる。学生は自宅で課題をし、半期に3回の小テストを行う。3名のTAが課題のチェックをして、授業担当者に連絡をする。SEE-Inputでは、評価の20%に自宅学習の成果を反映させることが定められている。

最後に、正課外の取り組みを紹介する。2018年度には、マスコミュニケーション学科の新倉貴仁准教授が成城大学モダニズム研究会を組織し、文芸学部の後援で、シンポジウム「成城を住まう都市、住宅、近代」(12月8日)とそれに関連するワークショップ4回を開催した。ワークショップでは、学内外から講師を招き、戦前と戦後にわたる成城の歴史を手がかりとしながら、都市と住宅、学園と街が論じられた。文芸学部の関連する授業と連動し、その履修生に出席を促し、その場で書いたレポートを評価にくわえるという試みを行ったところ、木曜日の18時からという時間帯にもかかわらず、50人前後の学生の出席があった。さらに、アンケートの自由記述には、聴衆として参加した教員と講師の教員との質疑応答から知的好奇心を呼び起こされたという回答や、研究会そのものへの新鮮な驚きを表現した回答がみられた。学生たちに文芸学部で展開されている学問を知らしめる機会になったという意味で、FD活動の一つとして紹介することにする。

以上の文芸学部の取り組みについての情報は、木下先生と新倉先生に頂き、授業評価アンケートと授業改善アンケートのとりまとめは、教育イノベーションセンターをお願いをした。この方々の助けがなければ、この原稿は書けなかった。厚く感謝する次第である。

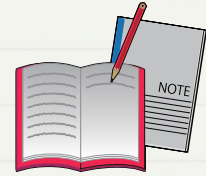
各学部のFD・SDへの取り組み2

法学部

法学部の取り組み方

法学部

新山 一雄 教授



3年前のこのコラムで、私は、つぎのようなことを書いた。法学部では、「とくに『教育イノベーション』と銘うったような活動は、存在していない。しかし、学部長、学科主任を中心に、法学部の研究、教育の質の向上に向けたさまざまな取り組みは継続して行われている」。そして、その例として、新装となった5号館地下の資料室の設備の使用法の学部スタッフへの周知徹底、『カリキュラム検証委員会』によるカリキュラムの改善を紹介した。ただ、そのときは、法学部、とくに学生に対するディベロップメントを中心に考えていたのであって、法学部のSDの取り組みについては言及していなかった。

それは、ずーっと前から続いている「現代法研究室」の活動である。同研究室は、まさに法学部スタッフの資質を高めるための勉強会を行うことを任務としており、たびたび外部から講師を招いて、講演会を開いてきていたのだ。本年度も、興味深く、有意義な講演会が行われているので、少し知っておいてもらいたい。題目は、「AIと法」というもので、昨年度からの連続講演で、その第3回目が本年度に行われた。AIの進展が、法律、法学にどのような変革をもたらすものであるのか、というものであるが、ご承知のように、法というものは、基本的に、人と人の関係、人の行動を規律するものである。それは、原初的なものであって、ローマ時代から、人類の誕生以来から普遍の常識、同理論といったものに根差しており、これからも変わるものではない。

それが、AIという、いわば法の外側にあるものの進展が、なにか、これまでの法律関係、法に対する考え方を変えなければならないのか、という、われわれ法律に関わる者が、これまで考えもしなかった問題を提起する、講座の内容であった。少し具体的に、分かりやすく話をすると、この第3回目、本年度の講師は、憲

法の教授であったが、ビックデータの活用は、人のプライバシーを危うくすると論じられた。いわく、AIの本質は、データを解析することによる「予測」であり、データが膨大になれば、精度の高い予測が可能になる。そこで、各人のデータが集積されていけば、誰がどのような行動をするか、過去にどのように行動したか、また、ある状況で誰がどのようなメンタリティーをもつかが、AIをとおして、白日にさらされることになりかねない、というものであった。

正直、このような問題設定は、私を含め多くの法律学研究者が考えもしなかったものであり、これまでの人と人の関係、人の行動を規律する法律学の外側にあるものである。しかし、想像するに、これからますますAIが進展し、AIが活用されていけば、われわれも、われわれがやっている法律学を、根本から考え直していかなければならなくなるであろう。私は、このような深い、根源的、先鋭的なテーマを設定し、それを論ずる最適の講師を探してきた、わが法学部現代法研究室の洞察力に心底感服すると同時に、われわれ法学部スタッフのディベロップメントも考えていてくれたのだなと気づいた。これこそ、まさにわが法学部におけるSDの試みである。

SDの話しながくなってしまったが、FDについては、ひとつ、教務委員会における学生のための改善が進められていることを、紹介しておこう。法学部の講義科目に、「裁判制度論」という、民事訴訟、刑事訴訟、行政訴訟などを概観的に紹介する科目が、一年生用におかれていたが、民事訴訟等については、それぞれの専門科目で学べばよいということで、「裁判法入門」という、これら訴訟、裁判というものは何のために行われるのかを、これから法律を学ぼうとする一年生に、一から教えようというものに、代えられつつある。

ピアチューター制度に係る SD活動報告

<Supporters' Forum 2018 at Seijo University>

2018年12月15日(土)に、他大学との交流の場として本学が主催するサポーターズフォーラムを開催した。2回目となる今年は、21大学および高校1校、総勢約150名が成城大学に集まる大きなイベントとなった。

当日は「学習」「国際交流」「キャリア教育」「図書館」「バリアフリー」をテーマとした5つの分科会に分かれて、サポート活動の報告やディスカッション、グループワークなどを行い、その後全体会で各分科会の報告を行った。

フォーラム全体において、他校の活動状況を知り、サポーター活動全般に共通する悩みや課題等を共有する中で、他大学の学生同士職員同士はもちろん、他大学の学生と職員といった、立場を超えた交流も深めることができた。本学職員も多様な価値観に触れ大いに刺激を受け、今後の活動にも活用できる多くの知見を得ることができた。

なお、フォーラムの開催に向けては、各サポーター団体の代表学生と各部局の職員とが月に1~2回の打合せを行い、準備を進めてきた。打合せや準備作業においては、職員は学生の意見を尊重しつつ、どのようにしたら学生の主体的な行動を引き出し、また、創造性を発揮させることができるのか試行錯誤しながら学生の支援をさまざまに行ったが、これ自体がSD活動の大きな取り組みともなった。



分科会の内容	
分科会1	<学習に関するサポート> 活動紹介やディスカッションを通じて、今後の活動に活かせるアイデアを掘り起こします。
分科会2	<国際交流に関するサポート> 各大学の活動報告を通して、活動の比較等を行い、改善点やアピールできる点を探ります。
分科会3	<キャリア教育に関するサポート> 活動紹介や学生主体のキャリア支援活動について情報共有を行い、ワークや討論を通じて理解を深め、課題発見につなげます。
分科会4	<図書館に関するサポート> 各大学の活動を共有し、学生企画の可能性や自由度を探ります。
分科会5	<バリアフリーに関するサポート> 各大学の支援活動に関する質問・回答を行い、支援活動における心がけ等、情報共有と話し合いを行います。

<大学教育研究フォーラム ポスター発表>

2019年3月23・24日、京都大学高等教育研究開発推進センター主催の第25回大学教育研究フォーラムにおいて、ピアチューター制度をテーマに本学職員2名(教育イノベーションセンター、図書館)とピアサポーター学生代表(文化史学科2年生)がポスター発表を行った。

本学のピアチューター制度は、学生の自主的な活動を尊重すべく、教職員が研修制度の確立や活動支援等に深く関わっている。

今回のポスター発表の内容も、教員からのアドバイスや、職員による実施連絡会での意見交換を重ね、まさに教職学協働のもと作り上げたものである。

当日は、ピアチューター制度自体が教職員の発案をきっかけとしたものであり、研修にも教職員が積極的に参加して、担当職員が講師となり資料検索や時間割相談等の研修を実施し、研修内容の検討や振り返りを行っていること、更に、コーチング等スキルを日常業務で活用していることや、研修中のピアサポーターの率直な意見を業務改善につなげていること等、ピアサポーターの育成がSDの機会として機能しているという成果などを報告した。



「授業カタログ」を刊行しました!

本年度のFD活動における、授業改善を図るための制度的な取り組みの一環として、「学生授業評価アンケート」において高い評価を得ている先生方へのヒアリングをもとに、優れた取り組みや授業方法の共有を図ることを目的に、「授業カタログ」を刊行しています。授業実践の事例や実際に受講した学生の声を収集し、授業改善の工夫を冊子として「見える化」することで、教員の皆様の授業改善や効果的な履修指導へつながれば幸いに存じます。

2019年度作成の際も、先生方におかれましては、授業の取材・撮影のご協力をお願いいたします。



「ベストティーチャー表彰制度」を導入します!

2019年度より、本学教員の教育意欲の向上を図り、併せて大学教育の活性化を図ることを目的とした、ベストティーチャー表彰制度が始まります。

本学で開講している授業科目の内、優れた教育及び教育改革を先導している教員に対して、その功績を表彰します。

◆選考結果は、本学ホームページ等で学内外に公表いたします。

◆受賞者には、FD・SD講演会等における講演や授業公開、「授業カタログ」等への掲載依頼を予定しています。

2019年度活動計画

- 2019年 4月 ● 新任教員研修会
- 2019年 6月 ● 2018年度授業改善アンケート集計結果報告、公開
- 2019年 7月 ● ベストティーチャー賞表彰式
● 前期授業改善アンケートの実施
- 2019年10月 ● 前期授業改善アンケート集計結果報告、公開
- 2019年11月 ● 成城大学FD・SD Activity Report 2018年度版発行
- 2019年12月 ● 後期授業改善アンケートの実施
- 2020年 3月 ● 2020年度事業計画、予算概算要求書確定
● 授業カタログ発行
 - ※1 時期が未定の事業
 - ・FD・SDにかかる研修会参加、他大視察
 - ・FD・SD講演会・ワークショップ
 - ※2 事情により、上記の予定が変更になる場合があります。

成城大学教育イノベーション委員会FD・SD小委員会委員 (2019.5.1現在)

委員長	杉本義行 (教育イノベーション委員会委員長)	
委員	杉本義行 (教育イノベーションセンター長)	花井清人 (経済学研究科)
	大津武 (教務部長)	富山典彦 (文学研究科)
	中田真佐男 (経済学部)	松田浩 (法学研究科)
	高名康文 (文芸学部)	村田光二 (社会イノベーション研究科)
	新山一雄 (法学部)	杉本義行 (全学共通教育運営協議会議長)
	青山征彦 (社会イノベーション学部)	大友浩一 (事務局長)